



鈴木与平氏講演会

「天空の夢 新産業への挑戦」

静岡商工会議所・新産業開発振興機構は設立15周年記念事業として、鈴木与平氏を講師に招き、講演会「天空の夢 新産業への挑戦」を2017年2月15日、グランシップ・中ホール「大地」で開催しました。その講演の要旨を紹介します。（文責・企画広報室）

7年間で順調に育った航空事業

鈴木与平氏の航空事業は、(株)フジドリームエアラインズのほかに、日本のいろいろな空港で地上業務を行う(株)エスエーエス。中部国際空港セントレアで日本航空を中心とするいろいろな外国の航空会社の地上業務を行う(株)ドリームスカイ名古屋と中部スカイサポート(株)。静岡新聞・静岡放送の報道のヘリコプター、富山県・新潟県のドクターヘリ、静岡県の防災ヘリの運行を行う静岡エアコミュニタ(株)があります。これらの航空事業で働く社員は1500名、売上は約270億円。7年前に数人でスタートした事業ですが、難しい仕事の割には順調に育つてくれたと思っています。

私は学生時代、グライダーをやっていたのですが、その仲間組織する日本学生航空連盟には、いろいろな大学が加盟していて、その卒業生は航空事業に参加する人が多いのです。私が航空事業を始めるにあたっては、その仲間たちが何人も馳せ参じてくれました。いろいろな方に支えられて、ここまで来たことをよく思います。

これから、どういう形で航空事業全体の経営を安定させていこうかと考えているところです。

航空事業との関係が深い静岡県

静岡県は航空事業と関係が深いところです。戦前は、浜松、焼津に軍の基地、牧之原にも海軍の航空隊の基地があり

ました。ヤマハさんは飛行機のプロペラを作っており、磐田の福長三兄弟は大正8年(1919)に飛行機を扱っていました。1930年には東京から下田経由で清水まで定期航空路が開設されました。日本で初めて女性キャビンクルー搭乗の民間定期飛行が開始されたのは静岡県です。女満別空港の礎をつくったのは三保飛行場を開設した根岸錦蔵さん。こうした静岡県の航空に関する歴史を伝えるために、静岡理工科大学に静岡航空資料館を作りましたので、ぜひ、お出かけください。

静岡空港を応援するために

日本の民間航空業界は長い間、日本航空さんと全日空さんの2社体制でした。最近になって国土交通省が規制解除をした後、いろいろな方が航空事業に挑戦して、失敗しています。

航空事業は、軌道に乗せるまでに時間もかかりますし、おカネもかかります。我々のような小さなエアラインでも、1機の飛行機をかうと、最低でも40億〜50億円。そして国土交通省のライセンスをいただくまでに2〜3年かかります。その間、収入はゼロで、機体の支払に加えて、パイロット、客室乗務員、整備士の訓練も行わなければなりません。

そういう状況で、敢えて航空事業に挑戦しようと考えたのは、静岡県の石川知事が空港を作る決心をされたからです。当時、静岡県の経営者で航空事業に関心を持ち、航空業界とつなが

りを持つ方はいませんでした。私は空が好きですから、静岡空港を応援する必要があると考え、航空事業に参入したわけです。

最初は、プロペラ機を購入して、伊豆大島や八丈島へコミューター航空で飛ばしたかどうかと考えていました。

ところが航空事業について調べていくと、世界の流れが、コミューター航空から、地方都市と地方都市を結ぶリージョナル航空へと大きく変わってきていることが分かってきて、それならリージョナル航空に挑戦してみよう、という気持ちになりました。

エンブラエル機との出会い

このリージョナル航空のイメージにある飛行機を探そうちに、ロンドンのファインボロー国際航空ショーでブラジル製のエンブラエル170の飛行機に出会って感激したわけです。この飛行機は、最新鋭の装備をもち、地方空港に適したサイズで、1500mの滑走路でも離着陸でき、経済性もいい。機内は、ダブルバブルというダルマさんのような胴体で、ゆったりとして、背が高く、立って歩けます。ボーイングやエアバスと変わらない乗り心地とスペースを持っています。

エンブラエル社は、第二次世界大戦で負けたドイツから亡命したメッサーシュミット社などの技術者を受け入れ、さらにオランダのフォッカー社の技術者も受け入れるなど、技術的にしっかりした会社でした。工科大学を卒業した日系二